

教祖御書翰集

下

特35-998



\*1200800187660\*

特35

998

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始



教祖御書翰集 下



誠無以言之矣。每念及此，則深為  
隱慮。故欲不以是時為之，而  
子息猶在。然豈可謂子無所為也？雖然，中事無  
不復可為。今所作，但可付與。其後，  
何角。但子之兄，已出。上積之委，大抵皆  
沛邑教祖手。如郎君，亦不快。所株子，是  
力也。向之，以爲多。今發，亦見回。上之，不  
足也。——夫子，亦可。愚不宣。誠至難，有

又至下物りに付事より強ひて入る  
病氣などは已口もあらずと古事記を東方  
度もあらざる有難き事ありて此處では  
かち心地とて何へ事の如き能ひて是に上  
二月十九日

馬住也原

志賀厚守様

近頃よりお歳旦先月の如すよりお陽射  
照り之を申す中殊の如く般格方へて大いに氣  
を失ひ入浴し其後は病寢向て多數の

うかひの如形程がお何ん多忙の爲め  
六七日古くはおまづけられハ日々おおとくへり  
たかくへくは宜氣無れに處ゆるから申  
多事ある高きの所思ひ取れども甚しきか  
老凶生えりゆゑもなぞ歎く天與て相應直布から  
しやくせまで大に宣意自下おちがひ爲主を以て  
とはみをもれり日本よ高まく快楽事はモ有ハシ  
教なまくもくくうちた大方平生のれどもひ  
有げ称づらまうとひ是れ事多可い難事  
名も是れはまうとひはれん力在せと云ふ事なる  
方いたぢ然るも急氣算ひ多うたつて色下

三

毛色

石井  
居間  
居候

之故有事無事人自覺之不覺  
中事也此事亦可平也可大而加之事性也事之東方  
之處也此事也行時才多數日久也勿以事為  
事也未六子事事不爲事也至  
謂事爲萬物者因事而事事也謂事爲萬物者也  
事事不爲事事也事事也事事也事事也事事也事事  
事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事  
事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事  
事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事也事事

の事はおまかでござりぬにゆめ叶ひ事は乞ひ  
おまかでござる其の内に御下すまこと申合は  
候が如きは爲る事先づ氣れ（如前）此處に

ありとどり

辰巳能作様

多き事也（前記御内申合は此處に御下すまこと申合は  
候が如きは爲る事先づ氣れ（如前）此處に

申合たる事無

一章既存を以て其の比焉の御事は機嫌能  
く成る所御事也御事も勿體無事に比  
若者之は方程你以て努力致らば有次六

子第毛之在連中不強肩毛之れ事有居やと志  
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事  
仕事事事事事事事事事事事事事事事事事事事  
地之御事事事事事事事事事事事事事事事事  
う事事事事事事事事事事事事事事事事事事  
一ノ事事事事事事事事事事事事事事事事事  
一ノ事事事事事事事事事事事事事事事事事  
一ノ事事事事事事事事事事事事事事事事事  
一ノ事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事事

事事事事事事事事事事事事事事事事事事

事事事事事事事事事事事事事事事事事事

四

九月二

既介你

當時何以能以是事取之也

嘗之未用多矣即已生憲多而無所寄  
多以移乃職雖久不居其上而以多爲  
所用多也多者不以不居其上而以多爲  
多者

所之少數亦可乎而大乃ハ之多之  
例之少數之少也非也而以多爲  
多者多也而以少爲少也而以多爲  
少者

又至數亦可乎而大乃ハ之多之  
故人之難有事

多之少數亦可乎而大乃ハ之多之  
持也少數亦可乎而大乃ハ之多之  
多者多也而以少爲少也而以多爲  
多者多也而以少爲少也而以多爲  
多者

一筆終止所之多數亦可乎而大乃哈  
改生右脚乃事多有之多數亦可乎而大  
多數亦可乎而大乃哈之多數亦可乎而大  
多數亦可乎而大乃哈之多數亦可乎而大

まことに利害にはれのむきに取扱ひがたる所  
を知りてはぬいふとぞ思ふとゆくに所  
よりハシの角より一筋の毛皮をあ離さう  
ものかくやくまゝ離す事多すとぞ此世界我  
人のうちとあるやうの事多すから何とは  
やく(是れをゆく人多くとす)さうすから何とは  
くさんと一筋とゆく様子あら生ればうん  
けむる事あれば出でよとぞの事多す

吉川文  
能介稿

一筆稿古方枝折れは直多しの事あら在りて  
燐能古也和氣絶而落葉多是る事あら在り  
多氣古也得はる根古也よく次あるゆき向てお  
高枝り下枝も高枝も高枝も高枝も高枝も  
古也感性多き事あら是れはうきもうきも  
多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣  
多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣  
多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣  
多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣  
多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣  
好氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣

好氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣多氣

人を殺す事もあれば死んでしまふ事もあることを  
えぬは親子たゞまつて思ひ難い事ある事ある事  
まとあるこそ多く三千七百萬石の領地を有りた  
しも事あひたすれどつるぎすまつて一ノ谷山より  
えすとくの身と云ふ人となり候考てうそ若き  
はが病魔に罹り生れ難い病のものま  
る事無事無事より往後は日も夜も寝むら  
り是火宅と云ふ事とやうじをねむ  
えれどすとテスラナリテスラナリテスラナリ  
門り消す人々アーティストと多くてくらしを  
おもててゐたが承てて見ゆかぬ

種々あるひよる故に方あへんすら中止す  
テアドリーめうわの常と云ふては御前事アリ事  
えのるを云々をすむちやのよこ天のすすきを  
あざさざくさきうりてお」「他一ツいは定め立  
ち生す地主ありて政有事自らお自身のみを  
くくらるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
天のきりひきりひきりひきりひきりひきり  
等多めと見ひきとみすす思ひぬすく天のよみ  
かかゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

1674年正月住居

石鏡乾杯後  
鶴鳴峰上

先づ後事を終て後はまことに  
一筆書上仕事は猪口をもつてお先に御膳  
煙草とあはれ御自の事は事も内に附多めでる  
かがりの事は猪口をもつてお先に御膳と同様に  
お書き下さり乍ら御車附りておまくとお  
こわく事は多き事とお書き御名を角田の御子には  
陽ち色とおぬせじたゞるもの

廿年正月は雪花見るやうふか不思ひますよ  
けうれ事すのゆゑ事と思ひておもひ  
くと興へる事ある事より又おなじ事とおもひ思  
ひます。廿年の事は誰かおもひ事とおもひ  
うる事ある事はおもひ事とおもひ事とおもひ事の  
西子の事とおもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ  
うる事の事とおもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ  
うる事とおもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ事と  
おもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ事と  
おもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ事とおもひ事と

事や有り難い事は  
とおもひたる事は  
向ひ思ひ立つ事は  
何事か山の事は  
何事か山の事は  
何事か山の事は

卷之三

此有者相  
處而得之  
如仰天望  
雲無所依  
亦復何能  
成其事也  
故知其可  
以不勞而  
致成功者  
非無所有  
也

致の申度實を以て原稿の序文より外  
不仕合自らの時計が付する事は序文  
と於ては書かれてゐる事も確実である  
お即ち何處か御用紙を失くされ筆に手を  
失ふる所の如きは御用紙

二月十九日

馬住之介

貴時何時不厭ひに於ては又よき事す  
此れを竟に失ふ事無く筆有事  
已て所は感極まし即ち終由是多處之上既

此義教訓要先年ノ事也其事雖有事  
已て所は感極まし即ち終由是多處之上既

此義教訓要先年ノ事也其事雖有事  
已て所は感極まし即ち終由是多處之上既  
此義教訓要先年ノ事也其事雖有事  
已て所は感極まし即ち終由是多處之上既  
此義教訓要先年ノ事也其事雖有事  
已て所は感極まし即ち終由是多處之上既

二月十九日

馬住之介

一筆於手に付する機械の修理事は済少機械能  
中即ち終由是多處之上既

十

甲子年  
一月

14  
to  
er

馬化龍書

乞  
乞  
乞  
乞

雖有其面而無其跡  
中心而外見之者也  
惟其所以得之者  
亦惟其所以失之者  
故其失之者多也

一  
五  
七  
九  
十一  
十三  
十五  
十七  
十九

事事以爲難。你內外所據，必多虛實。我  
因急急打發人去，你多在衙門一宿，不可  
到此。依你多在衙門一宿，不可到此。  
我有急事，不能到此。我有急事，不能到此。  
事事以爲難。你內外所據，必多虛實。我  
因急急打發人去，你多在衙門一宿，不可  
到此。依你多在衙門一宿，不可到此。  
我有急事，不能到此。我有急事，不能到此。  
事事以爲難。你內外所據，必多虛實。我  
因急急打發人去，你多在衙門一宿，不可  
到此。依你多在衙門一宿，不可到此。  
我有急事，不能到此。我有急事，不能到此。  
事事以爲難。你內外所據，必多虛實。我  
因急急打發人去，你多在衙門一宿，不可  
到此。依你多在衙門一宿，不可到此。  
我有急事，不能到此。我有急事，不能到此。  
事事以爲難。你內外所據，必多虛實。我  
因急急打發人去，你多在衙門一宿，不可  
到此。依你多在衙門一宿，不可到此。  
我有急事，不能到此。我有急事，不能到此。

王  
孫  
之  
書

事事無心便是道  
念念無朕便是君  
人人無我便是仙  
物物無朕便是佛

宣子之私

高  
危  
急  
重  
病  
人  
管  
理  
方  
法

不為失言却知  
多時猶未解  
多時猶未解

黑仔  
九月  
五號

黑龍江省伊春市伊春區  
伊春市伊春區伊春區  
伊春區伊春區伊春區

讀書有三不爲  
口到心不到爲  
眼到心不動爲  
心到口眼俱到  
方是讀書法

也すをもとよりすと居し在る事無く別無事也  
特と取り是ち又面之勢も見ゆるに免れん事也  
とすむの仕合結構取扱事も多は往々所を拂ひ才  
とすむ事も何事もあらず余難難有あるこそと能くす  
仰せられたまふ事也と毎年而くらむ御宿うち候う  
御宿へ往有事向ともかとも御下ろす事も多  
もえ能くやと申すが先ハ矣れど此ひる事は路程便  
主云々トシテ也

大原

又事とてはあ然と其事をなすと  
一筆管上に付す極めて事多く故に往々書

蟻居所居ては居れど其事をなす事無く特  
殊殊殊能る事無く所をすくはぬてされ事居  
日本也は事もあらずと易く思ふておもつ

一筆管上ハ事もあらずと之を背ハ可事也

天皇天孫すと今と更に以ハ日記の世界(アシ  
カニ)と云ふ角(アシカニ)ありとこのあ事は「アヌ」則早  
アヌ道之直世急(アシカニ)と云ふ事有(アシカニ)ハ自是  
ヒ能(アシカニ)と云ふ事有(アシカニ)ハ自是  
おぬ(アシカニ)と云ふ事有(アシカニ)ハ自是  
おぬ(アシカニ)と云ふ事有(アシカニ)ハ自是  
天皇天孫之と云ふ事(アシカニ)と云ふ事を號ル

大原

三  
時  
一  
弓

王道光  
嘉慶  
道光  
咸豐  
同治  
光緒  
宣統

故其爲事也，必有過人者也。故其爲將也，必有過人者也。故其爲政也，必有過人者也。故其爲學也，必有過人者也。故其爲文也，必有過人者也。故其爲言也，必有過人者也。故其爲行也，必有過人者也。故其爲處也，必有過人者也。故其爲事也，必有過人者也。故其爲將也，必有過人者也。故其爲政也，必有過人者也。故其爲學也，必有過人者也。故其爲文也，必有過人者也。故其爲言也，必有過人者也。故其爲行也，必有過人者也。故其爲處也，必有過人者也。

中興之時  
當以爲  
急務  
不以爲  
急務  
則事  
無成  
不以爲  
急務  
則事  
無成

卷之三

乾  
介  
柳

九  
原  
二

之通肩多也  
其上八  
其下九  
其左七  
其右六

十一

お尋ねする色いろは更にうき

あひてわれまほを相つて林和子新歌

此うち有申らばくひづるすと宣教と  
記す想の附れ可不りもむすめのう事發とをもと  
考へり也付はゆる事もさう湯下すよ

一筆初登在時方物定次所歸、乞候中差  
少機知能多所用也御事無處向處也事  
前後之とも成程其次をもよせんが故に重視  
也し下思ふる方多く思ひてゆき  
方々と改進事務が如御事行

堅き汗を被我頭の髪を落と、身に先づぬか  
事とくにいたくはなしし所以丈丈、「お加瀬  
難有事事多うござりし是」、依頼は「一言  
家と字を二種と上ぬれハ度量算外、不意不承  
ひ、急處事中すらやう御り、且々仕合れ  
心外の事多うござり生手事多う御有事多  
事多う御事多う御事多うござり、身内に仰  
おまえす成る事多う御事多う御事多う  
事多う御事多う御事多う御事多う御事多

君麻子

黒住たる事多

馬德九系

卷之三

八

五  
一  
而  
重  
其  
事  
也  
不  
可  
以  
爲  
也

卷之三

十一

大處的氣氛，便已不復可尋。而這就是  
乙未之亂，清教徒運動的開始。  
三月，有旨以「甲子年」為「己卯年」，  
改元。是年，清軍在三月進逼長京，  
也煌臣之流亡。

王伯衡書  
萬葉集

一  
萬  
事  
多  
悔  
不  
如  
此  
也  
但  
是  
他  
必  
有  
之  
事  
物  
不  
可  
得  
也  
其  
所  
謂  
悔  
也  
不  
外  
於  
此  
也

—  
—  
—

馬 任 紹

心生多念  
氣亂如麻  
事多絕也  
此何能矣

東方先生  
一書  
存  
於  
此  
中

一  
教  
育  
方  
法

孫少川  
九月

如也。其室深

卷之四

卷之三

萬物皆有裂縫  
那才是光進的路

出處。常與人爭。不以爲能。而人多服之。其子曰。某。字子容。少孤。家貧。好讀書。不求甚解。每於人問。但說前人所不知。人多笑之。子容曰。吾聞之。知者不言。言者不知。吾不以爲謬也。

總理  
元

黑伍毛

昨夜は伊勢お色の匂ひで、早朝から社港  
筋で舟泊をすがり、もみの松の山頭より遠一里  
ちどりに相寄るやうな風景を眺め、仰下されなまこ  
と見えた。重い物は出でぬけれど、遠くまで手を  
引すと、おれの心がゆらぎ、氣はもよろびて、身が  
支え難い。端折りで、おれの心がまたもよろびて、  
肺へしこむ。

一段の何角の砦跡があつた。一木の木立  
併び、木立の向こうを、もよろびて、くま  
が這はれていた。おれは、おれの心を、

高木の家文子とも、へまぬかるうの物うなづく  
ほどのわざまを、おこして、木の向こうの中をまわ  
る。見えて、おれの足下を、あくまで、おれの脚は  
足踏み出でた。おれは、おれの足踏み出でた。  
おれの足踏み出でた。

「おれ  
志摩 7年秋  
玉 佐久奈

おれの足踏み出でた。おれの足踏み出でた。  
おれの足踏み出でた。おれの足踏み出でた。  
おれの足踏み出でた。おれの足踏み出でた。  
おれの足踏み出でた。おれの足踏み出でた。

此後以次々と子孫を出る事無くしてお山堂丈空  
が法事で此の山門の前で御坐す。かゝりより是より  
は後は此を承てやす。所も雖有年事なれど  
も考究の事無し。又御坐す。是處に至る所乃至  
御事は未だ有らず。す。高宗皇帝の御在位時程修復  
未だ有れぬ。其事は未だ有らず。所も御事は未だ有  
事無く。既而御坐す。御事は未だ有らず。所も御事は未だ有  
御事は未だ有らず。所も御事は未だ有

此一則へはまのいすす事不一と御事は未だ有

御事は未だ有

義理も單も實證も付す。しかば、甲のやうに

集てある。之と並んで近頃の御事は殊い。之の事  
此と御事は不見。然て天學大和の御事は未だ有  
生とろし。而て徳川御事は未だ有

御事

御事

當時御事は未だ有

秋高水也。故以種々事。御事は機縫成る。靡即  
手に掌て無事。其事は事中。而て御事は未だ有  
御事は未だ有



一教條

先づ御心病氣常に所寄之事にて其事異乎  
お病の如く御神氣是故に多良也之を以て又は  
内々存候事或い様も御心之を御心と申すから  
御心や御心事萬能也而曰ひて  
よきよりハオの事も勿論也又はおもてが  
御心と申す御心のあれこれおまえハ一切をし  
そ身もさへはすと申すと云ふれはほども

種一切の事に附生すありもあらずた  
りハ御心事やアリテの事もあらずばれハ天靈太  
神と同魂異の御心事事中御心也  
天皇大祚主一切事物を生す事方有御心、  
吾のあた而生す一切事事方有御心せんと云  
飞昇して生す事何事より也様不仕合  
外事色事形、大臣御心大義  
されニ御心事あり御心有ハ其事は御心也御心  
事の事も御心と云々と申す事も又云々  
御心いえきはも御心事御心も御心也

佛へ穴發

寺ノ門

正

位

まことに此事は御心の御事なり

時初極し程肩を過へ未先に暮夜未有處候  
核燈籠を燃せば其事無く即ち神事もあらず他  
而萬事多所以爲候かと多く是れに於てお言ひ所  
怪はれらるる事少く不思議ありとては事無  
て是れを爲いと極意氣りてお之を今が事  
きしむれ程事無く居らるる事無く事無

ちあれば此事は假に是れを御事ゆの事實  
人間の事とづこの事と事外の事も高祖の  
世を除き事の如れを考へうわうと即ち流  
れては事下の御事ゆの事御事ゆの事前  
佛と耶と云ふ事もやえ高祖と云ふ事はな  
まともも考へて人中よりとア御事と云ふ事  
と云ふ事と佛と云ふ事の用引り事と云ふ事  
と云ふ事と本と云ふ事と本と云ふ事と行  
事と云ふ事と本と云ふ事と行

寺ノ門

寺ノ門

住丸家

右後院外様

事事不爲無事事事不爲事事事事事事事事

高木の下に西國を寫出は二封の手札を送る事  
く於中おれの筆は未だ未だ未だ未だ未だ未だ未  
月日が経て後方より事なり也當初は有りて  
所存和九色印不感ゆる事存る事存る事  
存る事存る事存る事存る事存る事存る事存  
存る事存る事存る事存る事存る事存る事存  
存る事存る事存る事存る事存る事存る事存  
存る事存る事存る事存る事存る事存る事存

ありハ此上ハ事存る事存る事存る事存  
やう事存る事存る事存る事存る事存  
事存る事存る事存る事存る事存  
事存る事存る事存る事存る事存  
事存る事存る事存る事存る事存

四一

事事も我事事も事事も事事も事事も事事  
と事事事事事事事事事事事事事事事事事  
の事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事

皆無事あがへ廻 やまと以上

九月十六日

右 二

能介様

多幸也第も多聞也

御上廻の事有手筋を支那事の法より  
壁の事の毛利と他より事有て安元は既に  
存の様傳聞加在所の事有て是の事有て  
毛利事有て上院に付すと存

一月既降又、時計第一國の事有て

常主の事有て是の事有て何事かと詰  
之不在て是れ乃て又彼事の事有て是の事  
止生と有て之方事と有て是の事有て是の事  
と有て一脉下れハ一人れれ事有て是の事有て是の事

有て是の事

天蠶子神の事有て是の事有て是の事有て是の事

御くわからずいよと是の事有て是の事有て是の事

是の事有て是の事有て是の事

四月十九日

右 三

左 一

1945

黑  
住  
在  
東

追慕者甚多。如王羲之、顏真卿、蘇東坡等，  
皆有其書。王羲之《蘭亭序》、顏真卿《祭姪  
文稿》、蘇東坡《寒食帖》等，都是中國書法史  
上著名的代表作。

社拂所多文様序ア而居ニ他事モハ無  
事ナリシムテ所多用高シトハ多シシタ  
事多モアシ思シテシトナリトナリシタ  
事ナリ一ツナリ時事中多シテ多事事ハ多  
事ナリシテハ社拂出ルタジ奇一弓

天馬子那の山口ノ一ツナリは生ミトサリ  
は教ハ門人故マテ度而第ナバ空ミトキヤ  
学ノ内ハ其ナミ善病を高れヌリ快方を慕  
國也之ニ重以テ先ドヨウル事ニ生カテ難有ム  
事有リ一左目ト一右目ト一四目ナキ色ハ此トナキ事  
ナリテ御身ナキ事ナリ生主トナリ而テ初可ト有

吉見公義多モ御引出ル之恐惶仲言  
ナリナリ  
石庵能介様 黑住丸家  
吉見公義多モ御引出ル之恐惶仲言

事無所失失之未免事無所失失之未免  
事無所失失之未免事無所失失之未免  
事無所失失之未免事無所失失之未免  
事無所失失之未免事無所失失之未免  
事無所失失之未免事無所失失之未免  
事無所失失之未免事無所失失之未免

卷之三

黑  
13  
左  
手

書卷多才氣  
腹有詩書才  
腹有詩書氣自華

監修官書記録

之了

黒 住吉原二

不見能介様  
此事も先達の御内に在り候る事無く此  
事は御不承の事なり。年才十才の者  
をもり得る事無く此事に

筆者有事御奉多御身をもて  
次に筆者有事御奉多御身をもて  
思ひて是れ御先代御身をもて  
仕え、自身をもてと筆者有事御身をもて

筆者有事御奉多御身をもて  
何事も御身をもてと自身ももて御身  
も事無く、是れ御身をもて御身をもて  
御身をもて御身をもて御身をもて御身をもて  
御身をもて御身をもて御身をもて御身をもて  
御身をもて御身をもて御身をもて御身をもて  
御身をもて御身をもて御身をもて御身をもて

何事も大の事とおじか、言葉を強めます  
おそれとおもひたがれ、恐る御心をもて  
お書きえ形をもて御心をもて

卷之三

寫  
作  
記  
序

利多口  
日  
少口

天爲君作氣也。雖有自尊者，不見  
如是也。故外事之多，亦以經年  
之到處，多見其事，而不知其人。  
及以山中即事，而知其事，則已  
往也。今有將行，四年以來，未嘗  
不有此意。但未有此心。近來之事，亦  
多之矣。若不如此，則不無事矣。然  
而其後，每有此意，則不無事矣。

此中人語曰  
問之曰  
此何處也  
自云先世  
避秦時亂  
率妻子邑  
人來此  
遂與外隔  
不復出焉  
遂忘其  
所居  
後遂  
以爲  
此  
洞  
中  
人  
也

五十九

乾竹林

当之未以經而未之得也。不以水而以莊而學  
也。學也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
未之未之。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。  
以水也。以水也。以水也。以水也。以水也。

すれ事中二事もつけて下様子。着物の如き  
中丸堂や。も体堂。お取在中此。書院方の腰  
等。筆の如きは伊萬。又此處。腰等。一筆もつて  
アリ。着物の如きは形。もと。も。腰物。の如き。も。つて。色  
主のもの。左の腰。四事。も。主。と。腰形。右。左。右。死の  
事。左。右。腰。四事。も。主。と。腰形。右。左。右。死の  
事。左。右。腰。四事。も。主。と。腰形。右。左。右。死の

事。左。右。腰。四事。も。主。と。腰形。右。左。右。死の

此其一也。故知不窮而  
史氏之傳事也。是則事  
以爲有也。豈以爲無也。  
故曰。事者。萬物之體也。  
形而上者。聖人之道也。

卷之三

黑住氏

其在古之多此也  
其在今之多此也  
其在古之多此也  
其在今之多此也

物と取引する事もあれば、月日もあれば  
天金は仕合で取扱いの席で販賣を  
おこなうのであるが、その中で最も多くは  
高値で仕入れた後、低価で販賣す

り貰う。

天に化かす

物と取引する事もあれば、月日もあれば  
天金は仕合で取扱いの席で販賣を  
おこなうのであるが、その中で最も多くは  
高値で仕入れた後、低価で販賣す

り貰う。

紫岐お酒の事は、天に化かす事

強占城よりそぞれ難事の経由を多めに取扱  
物は、天金の仕合で販賣する事である。また一  
度仕入れた後、天金で販賣する事もある。  
いつも天金で販賣する事もあるが、  
天金で販賣する事もある。天金で販賣する事  
あるが、天金で販賣する事もある。天金で販賣す  
る事もあるが、天金で販賣する事もある。

天に化かす

天皇賞和琴の一人を佐原伊勢守  
吉原色音多様内  
一曲  
猿

が雷後のれの陽氣第自死とんく  
府、運通事社皆是も即行  
多々矣、やう力一丸いとれど  
至る所可止日おきに多く有  
来時名古屋市在り書店  
甚上一件未見也、此處にあ  
候事無事都知也、發送者人八村俊  
次中元家附書類と寫し、又手稿  
作成し居り、P君は既に此處に在  
る事多矣、打合をとて改方考観

新九子  
唐平  
孫

傳子  
孫

九  
卷

王氏  
馬良  
王良  
王良

地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣  
地多雨氣

を身にまといて故郷の風景をは噫のとをまき感  
じるる心事もあくまでもすむとすむと一  
面も餘艸もしかたぬくらなうて能く色をへ  
裏下とおもひあらゆる象形門事外金銀印墨も  
まづ傳泡のすまあ将とえどり地ハこう形と表  
ひがくあさととえどり形とえどり地ハこう形と表  
天照大御神と思ひやんとおもせよ故  
いわば又帝の御前御子供金銀もんす  
被の唐衣の御子供金銀もんす

王有方山  
黑徑  
大系

一  
東  
京  
即  
稿

大事をなすりに  
何事もあきらめと  
さうすがすてむか  
天めん飛車有り  
とくにかへる事  
SP あり  
五色

地馬代の事とあわしあへからうこさりて居る  
事は直に事あるまいし、またもと居た所  
等をこの事あるまことに居候の所より、  
かくは事あるまいし、人中と見れること考へ  
たる事も多きと見ておれ。例「唐馬」御軍事  
と申すは佐太郎の御名の御也。

身を守らねば難い程、内鬼の事と御身  
と申す人、わがとくらむ事は神原高行、何  
事か思ひ出すと、おとづれ、是則又  
云詠句と申すらうと思ひておきながる。

之は神と氣とめ見りまじ也。惟陀言

之

馬化也、高

御身を守らぬ事は、自らも

一筆の事と申す事強居ても安づけぬ事も、  
御身を守らぬ事は、自らも御身を守らぬ事  
も、事あり方、向て事要る事すら可らず、由  
おゆは事を守らぬ事も、事を守らぬ事も、  
事を守らぬ事も、事を守らぬ事も、事を守ら

三  
四

黑虎

又  
予  
之  
在  
中  
國  
不  
如  
其  
在  
外  
也  
其  
在  
外  
者  
則  
其  
風  
氣  
之  
和  
樂  
也  
其  
在  
中  
國  
者  
則  
其  
風  
氣  
之  
不  
和  
樂  
也

嘗嘗於此觀音  
其音清妙不可言  
其聲圓潤不可聽  
其韻悠長不可尋  
其氣和暢不可觸  
其體圓通不可摸  
其音無方而自成  
其聲無體而自應  
其韻無響而自響  
其氣無聲而自音  
其體無象而自形  
其音無聲而自響  
其聲無體而自應  
其韻無響而自響  
其氣無聲而自音

卷之三

中華民族之研究

中華書局影印  
清人詩集

卷之三

九  
卷

七言詩  
丁巳年夏月  
王國維書

方地自幼失之  
不能有

卷之七

天國寺御の御影をそひんやうの形とお放下  
争角しんじゆくをさむ外事は事は震で御臂  
はそへりたてしゆかの御仕事もおもとお私ハ我方  
年か一ふね等うやうてお

追う御上とおせりておまかせ御所へ電  
山先生下向て御事はおもて筋事とおもて筋  
門ちもとととととととととととととととととと  
トととととととととととととととととととととと  
トととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと

業者もあら内人の間の四家主方七八人も業者め  
りりあら泥地がわらうとれえのとれ  
門へ昇りたるを主事と仰のよが事とれ  
らうとあらきとあらぬいとお能事とすとれ

不居院介様

馬住たる業者

先日おもてお前を御存年をとてお心苦痛  
とおもてお前を御存年をとてお心苦痛  
とおもてお前を御存年をとてお心苦痛

之  
一  
暮  
秋  
日  
中  
午  
在  
室  
中  
休

一  
道すと、此の事は、御  
事の事も、也  
かまつて、そ  
うのちんは、  
せきと、あ  
るの下へ、お  
れを、さくら  
むと、おおむ  
ねに、ゆき

卷之三

馬任在系

毛氏之子也

王之

卷之三

毛里求斯毛利

卷之三

卷之五

易經

蒙古族人民  
大团结

石虎能  
不似

卷之三

王仲九系

山東集

馬 仔  
九 級

得第之日不以爲喜反以爲憂者  
惟君也。君嘗謂人曰：「吾子之  
生也，每使吾心如火，惄惄然不  
能安。」今聞此甚為君不樂。  
君嘗謂人曰：「吾子之生也，每  
使吾心如火，惄惄然不能安。」  
今聞此甚為君不樂。

王仲方題

右角作多角  
石壳能下接  
其身自得其生  
上者有骨而無肉  
皆以筋脉爲骨  
色黑主腎時少  
至子之日則氣  
之子之日則氣  
被蒙于子之日  
子之日則氣被蒙  
子之日則氣被蒙  
生也多氣少血  
火氣多火氣多火  
火氣多火氣多火  
火氣多火氣多火

の事あはれ何事もあらず  
尚へる事ありては國の上事もあらず  
の事無事な事な事な事な事な事な事

（鳥又ハ出食をあらむ）  
一石破風にハ也又余の事と云ふ事と云ふ事  
たる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
方よりれど様に云ひ國の内に一石ハ來之  
可と云ふ事自の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

物をめぐらしやう事者少も苟も苟も苟も  
かく家をもつて有り得る程印馬村史代丸  
佛門を出でて一夜の宿泊先を失ひては跡  
の跡と化すに至りては其の事と云ふ事と云  
ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

ノリ教を傳  
石尾能介傳  
黒住元泰  
吉田六郎一ツ子即ち其の上

一筆記上所叶方物に事外傳本草記傳本草記

此詩作於  
己未仲夏  
時惟仲夏  
氣候宜人

九萬字

家  
人

卷之三

千言万语道不尽。此生不遇知音  
心有恨。与君争半壁。更无能事。事上也。未可。但  
力不足。则心不足。以是之故。以是之故。力不足。  
宜早作。而今。又。如。是。如。是。如。是。如。是。如。是。  
能。事。限。能。限。向。此。如。是。如。是。如。是。如。是。  
意。相。促。言。

丁巳初九

右序二

仲介稿

錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄錄

年年年年年年年年年年年年年年年年年年

暖。柔。多。博。和。廣。容。全。而。被。纏。繫。以。多。帮。忙。忙。  
以。由。事。也。事。也。忙。而。忙。而。事。也。事。也。事。也。  
因。忘。之。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。  
一。字。也。也。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。竟。  
以。卦。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。  
博。算。事。而。事。而。事。而。事。而。事。而。事。而。事。  
以。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。  
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。  
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

丁巳初九

右序三

卷之二

王氏  
卷之三

一  
年  
間  
多  
少  
經  
店  
家  
生  
意  
也  
將  
近  
一  
千  
萬  
兩  
金  
錢

言故以爲之也。而其所以爲之者，則又爲之也。  
故曰：「吾子之謂也。」

卷之三

子  
孫  
祖  
父  
考  
妣

ちの風景の如き  
御茶ノ水  
柳の  
川

君の心をもてて御身をかう

西天馬皇太郎は限つておれどもかくは事  
多大御子の多くをあわせとて御身をかう

一言

大學子御子とて御身をかう

ありと御子とて御身をかう

さるまえあがめらへに身をかう

まきとくお母、又お母とて身をかう

お母とお母とて身をかう

年月日

黒住左京

百萬の事多れすよしとて御身をかう  
者多在傍、安寧の株増殖往々り往々り  
とて全般はあくせりと御身御身不御身  
事とて過る事とて度えりとて居様の事と  
軍服と事とあひてやの事と御身とて川ととて  
ふははははははははははははははははは  
りとて御身とて御身とて御身とて御身とて  
御身とて御身とて御身とて御身とて御身とて  
方ねむとて御身とて御身とて御身とて御身とて  
げぬ事とて御身とて御身とて御身とて御身とて  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

卷之三

元祐  
元祐  
元祐

此身如寄  
行樂貴知足  
不作無益事  
不念無為心  
不知生與死  
但存一片真

乃至御事通お成りゆかへて此處に移すた  
て是る事多有不當相手有り出で事は大病  
と考へ候事有り候事一處も皆死也死也  
彼處を晦す事多有りて是れ事之甚也  
死也故方々事有り候事有りて是れ事之甚也  
故方々事有り候事有りて是れ事之甚也  
故方々事有り候事有りて是れ事之甚也

鶴川伊豆守

黒住左京

御事通お成りゆかへて此處に移すた  
て是る事多有不當相手有り出で事は大病

ノリシホミ先室致りて久有事焉之便事  
ササニシケル也事宜矣事有り候事有  
念しキハ事々く御門也事有り候事有  
ね御事有事事有事也事也

志賀厚平候

黒住左京

追慕也林わ用事處事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事

諸侯之子也  
其子又皆  
有才氣  
故其子  
皆為卿  
大夫也

事多々と承り  
大正七年七月  
印鑑を以

卷之三

黑伍  
右

先君之子  
子雲之子  
子高之子  
子建之子  
子朗之子  
子良之子  
子衡之子  
子康之子  
子淵之子  
子瞻之子  
子由之子  
子瞻之子

天寒方得使  
計之而知其  
有上而能下  
者也。故其事  
成于其先，其  
功在于其後。

馬場洋吉

官文

左

京

教祖御書翰集下巻終

明治三十二年八月十六日印刷

(定價一拾錢)

明治三十二年八月廿二日發行

版權  
所有

編輯人

加茂巖龜

出縣岡山市大字下西川町百三十番地  
兼

印刷人 木山重太郎

終

